

## 国宝高松塚古墳壁画修理作業室の専門家公開（第4回）における主な意見

国宝高松塚古墳壁画修理作業室の専門家公開（第4回）を実施した。概要は次のとおり。

1. 実施日：令和元年8月7日（水）
2. 場所：国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）
3. 対象団体

考古学分野：考古学研究会、日本考古学協会、古代学研究会

日本史学分野：史学会、日本歴史学会、歴史学研究会

美術史学分野：美術史学会

保存修復分野：日本文化財科学会、文化財保存修復学会

※考古学分野5名、日本史学分野3名、美術史学分野5名、保存修復分野3名を対象として、1時間の高松塚古墳壁画実見の後、別室で担当者らとの意見交換などを行った。

### 4. 主な感想・意見

- ・壁画がきれいになったのは印象的だが、石材の亀裂が思った以上にたくさんあった。石材については強化処置など行っているのか。今思うと、天井第一石などはよく解体できたという印象がある。（保存修復）
- ・しばらくの間修理作業室で保管するのか。将来計画を知りたい。（考古学）
- ・第1回専門家公開で話題になった現地保存については、今はどのような考え方なのかを知りたい。（考古学）
- ・研究成果の活用や報告の仕方などのソフト面について、各方面での情報発信は良いことと思う一方で、報告書が刊行されていない段階で部分的に成果が応用されているのが心配である。正式な報告書の刊行を期待するし、成果の活用に関する方針も明らかにしてほしい。（考古学）
- ・前回の専門家公開ではカビにばかり目が行っていたが、今回はカビではなく漆喰に目が行った。漆喰材料もわずかな年代の違いで違ってくるので、修理方法もケースバイケースと理解したほうがよい。（考古学）

・最終的な高松塚古墳壁画の修理報告では、キトラ古墳壁画修理との相違点を明確にするべきである。なお、従前より指摘してきたことであるが、当時の発掘関係者は目視による経年変化比較が最も可能な条件を備えているので、定時の定点観察の場や検討会にも入れて、たえず変色やカビなどの増加を確認させるべきであった。発掘調査に参加した者として向後は考慮の一つに入れてほしいと思う。(考古学)

・これまで学会などで報告を聞いて状況を把握していたが、実物を見て改めて分析・修理の苦勞が伝わった。また、修理のノウハウや施設環境などの保存科学分野の研究テーマが凝縮していると感じた。今後、この成果をそのまま地方における保存修理の現場で使うことは難しいが、応用する形で現場への技術移転が期待される。また、屋内環境に移して保存修理を行ったことにより、現地調査では得られない微細なところまで成果を得ることができた。解体し室内に移動した意義は大きかったと感じている。(保存修復)

・今後整備される保存管理・公開施設について、可能な範囲で、より近い位置で実物を見ることができ、壁画の素晴らしさだけでなく、修復の勞力が伝わる施設になるとよい。(保存修復)

・星や日輪の一部に残っている金の使用が大変きれいである。物質的に侵されない感じがした。東と西で女子群像の裳の表現に違いがみられ興味深かった。(美術史学)

・描線のことを気になった。ラフとまではいかないが、さらっと描いているイメージである。ひとつの線にも太い・細いがある感じがする。玄武の体にもさらさらと描いているところが見られる。お墓だからなのか、あるいは何か早く仕上げなければいけないといった事情があったのか、即製とは言わないが、ある程度下書きができたあとさらっと描いたことが興味深い。古代ということかもしれないが、それだけではなく、築造の状況も反映された線なのではないか。捻紙法が使われているあとはないのか。(美術史学)

・線が伸びやかだった。太い・細いといった変化をつけてさっとひく。どうして四神は南へ向いているのだろう、南に来世があるのか。男女群像はそれぞれ違う方向を向い



ているが、まとまりがないようでまとまっている群像である。伴大納言絵巻でもいわれている技法がここにもすでにある。(美術史学)

・色がきれいに復活した印象を素直に感じた。白虎も拡大鏡で見れば図像が確認できる。石材を拝見できて加工技術が優れていることがわかった。かなり平滑な表面仕上げ、かつ漆喰を薄く付けるために細かい引っかき傷もみられる。(美術史学)

・日本国内の墓室に入る機会がないので、今回の公開で規模感がわかった。古代の他界観に興味の中心がある。すでに仏教的なものが入っているこの時代に、墓をどう作るのかに興味を持っている。仏教美術と共通するモチーフは、薬師寺の四神がほぼ唯一の例である。東西の天象は、中国の墓にも出てくるモチーフ。日本では玉虫厨子にもあり、仏教的な須弥山世界と中国の天界が習合している。中国でも習合している。今日のモチーフはそれを繋ぐものとして面白いと思ったが、仏教的なものはある意味排除されていると感じた。今後考えてゆきたいテーマである。(美術史学)

・前はカビがひどい状態であったのがずいぶんきれいになった。絵の様式が平安時代とはちがう。唇の表現などもしっかり描くと感じた。(日本史学)

・非常にきれいになっている印象を持った。特に金箔、女子群像裳の部分の色の対比が印象的であった。従来の研究では被葬者がだれかに関心が持たれてきたが、高松塚が大室律令ができていく時期にあたることも重要である。近年の古代史研究では特に、大室律令を機に国家の仕組みや社会の方向性ががらりと変わるのではないかとされている。国家形成史のなかで高松塚・キトラ古墳をどう位置づけるのかいう意味で興味があった。修理や分析などの有益な情報が報告書にとりまとめると思うので、古代史研究のためにも情報発信を行ってほしい。(日本史学)

・漆喰が残るところは床も含めて予想以上に真っ白であった。中は真っ白な空間であることがわかった。製作過程、埋葬過程についてもヒントをいただいた。床南側の絵具のこぼれ、棺による傷などは、その状況の復元につながる。金の破片が絵のないところに残っているのは、どういう理由だろうか。



トルファンのお墓では、紙に描いたものを壁に貼って壁画の代わりにしている。壁画以外にも壁に貼るような装飾があったのかと想像される。ただ釘の跡は見られない。これについての解釈も広がりのあるテーマである。(日本史学)

・ 絵画で用いる金箔より厚みがある。大きさがかなり均一で、どれも平面。薄い金板を切り出したのか、それとも型抜きなのか。星宿図で高松塚とキトラの技法の比較ができるのではないか。壁面の金箔については、棺が擦れた時に棺の装飾が付いたという話もあったが、擦れた金というより、しっかり付着していると感じた。金を用いた装飾もあった可能性があるのではないか。(美術史学)